

平成 21 年 6 月 9 日現在

研究種目：基盤研究(C)  
 研究期間：2005～2008  
 課題番号： 17520235  
 研究課題名(和文) 環大西洋圏における表現媒体と修辞法を中心とした文化のインターフェイス研究  
 研究課題名(英文) A Study of Expressive Media and Rhetoric as Cultural Interface in the Trans-Atlantic Zone  
 研究代表者  
 梶原 克教 (KAJIHARA KATSUNORI)  
 愛知県立大学・文学部・准教授  
 研究者番号：90315862

研究成果の概要：イングランド、アイルランドから、カリブ海諸島を経て北アメリカにまで広がる英語圏の文化、とりわけ植民地主義以降の文化を、環大西洋圏文化として位置づけ、そこに見られる共通性として、おもに以下の2点が挙げられることを立証することができた。(1) 1960年代以降の当該文化圏文化においては、形式・媒体を通じて伝えたい意味を表現するのではなく、特定の形式・媒体自体を利用すること自体に重点が置かれている点。(2) 表現形式において俗に身体性と呼ばれるものが、言語においては「比喩的」次元と異なる「形体的」次元と関係がある点。

## 交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2005年度	1,100,000	0	1,100,000
2006年度	800,000	0	800,000
2007年度	600,000	180,000	780,000
2008年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
総計	3,400,000	450,000	3,850,000

研究分野：英米文学・英語圏文化・批評理論

科研費の分科・細目：文学・各国文学・文学論

キーワード：カリブ海地域、文化論、ポストコロニアリズム、表現媒体(メディア)、修辞法

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 従来のポスト植民地主義研究において中心となってきたのは、E. サイドの『オリエンタリズム』に代表されるように、西洋が非西洋をいかに表象してきたか、またその表象法に潜むイデオロギーという側面だった。被植民者についても、あくまで「犠牲者」として扱うといったいささか感傷的な扱いが多かった。それに対し、「被害者」「加害者」といった泥仕合をとりあえず括弧に入れ、旧植民地の被植民者および移民自身が自ら駆

使用する表象法・修辞法に焦点を当てようと考えた。それは記述「形式」に焦点を当てるという点において、記述「内容」に焦点が当てられがちな現行の研究趨勢と差別化された独創性を持つと思われたからである。

(2) しばしば作品と呼ばれもする文化的産物を制作者や作者側から把握する美学的・文学的研究がある一方で、その受容のパターンと傾向性を後追いつける社会学的研究がある。そのどちらとも異なり、その両者の「インター

フェイス」に焦点を当てることで、特定の民族・人種の内面の反映として文化表現をみる「本質主義的」文化研究からの脱却を試み、「インターフェイス」としての言語的・身体的修辭が共同体へもたらす効果を動的・生成的なものとして構築主義的に捉えることになる必要性を感じていた。

## 2. 研究の目的

1960年代から現代にかけての環大西洋圏文化における「表現媒体」と「修辭法」という二種類のインターフェイスを研究することを目的とした。ここで便宜上「インターフェイス」と呼ぶのは、文化的産物・作品と社会との関係を調停し決定付ける装置のようなものである。以下、「表現媒体」と「修辭法」の二種に分けて研究目的を述べる。

(1) 表現媒体について：カリブ海地域在住の作家たちが詩と演劇という媒体を利用する傾向があるのに対し、カリブ海地域出身でアメリカ合衆国やイギリスへ移住した作家たちが小説という媒体を利用する傾向が強いのはなぜかを、環大西洋文化とそれぞれの社会における文化的産物の位置づけと効果を中心に明らかにすることを目的とした。ただし環大西洋圏に共通した非文字的媒体の受容とその効果の同一性と差異を視野に入れておく。

(2) 修辭法について：アングロ＝サクソン系の文化圏で“we”というところを、たとえばジャマイカのラスタファリアンたちが“I and I”と表現することからもわかるように、カリブ海地域では英語の型破りな流用が散見され、そうした修辭特性が効果として土地の共同体特有の大衆意識を形成していたりもする。それは北アメリカ大陸におけるアフリカ系アメリカ人共同体にも同様に見られる傾向であり、「ダズンズ」や「シグニファイイング」といった、アングロサクソン系とは根本的に異なった修辭法が存在する。そのようなカリブ海から北アメリカにかけての諸文化に特徴的な言語的修辭と身体的修辭の用法について必要な数のサンプルを収集し分析することを第一の目的とし、最終的には、「身体的修辭法」に欠かせない「音響」や「視覚」という要素を(a)における表現媒体の問題(社会効果)と関連付けることを目的とした。

## 3. 研究の方法

(1) 言語的修辭法と身体的修辭法に関する理論的考察および学会発表を通じての再検討：カリブ海の詩人デレク・ウォルコットの詩と、アイルランド詩人シェイマス・ヒーニ

一の詩を大西洋の両岸の文化的産物として比較考察し、修辭法に関する理論的考察をおこなう。加えて環大西洋圏の現代文化である。ダブ・ポエムや北アメリカのラップ等も上記詩人たちと同じ土俵上で論じることができないか、検討する。その場合、音響性および身体性と言語的修辭の類似点と差異に焦点を当て、美学・思想的側面から考察を加える。

(2) 西インド大学図書館での資料収集：これは若手研究(B)で収集しきれなかった分を収集するためのものである。とりわけ西インド諸島の住民のみならずイギリス・北アメリカへの移民も参加してカリブ海文化関連の議論や創作が掲載された諸雑誌(『ビーコン』『キック・オーバー・オール』『フォーカス』など)の記事収集をおこなう。身体的修辭に関するサンプル収集のために、トリニダード・トバゴでのモナーク等の取材も継続しておこなう。トリニダードはカリブ海の中でも最も人種構成的に複雑であり、人種間・国民間の調停を意図して国家を挙げて行われる側面もある年に一度の大規模な営為なので、社会のインターフェイスとしての文化産物という位置づけを念頭に収集、整理、分析をおこなう。

## 4. 研究成果

(1) 資料の収集・調査について

①トリニダード・トバゴにおいてモナーク等の調査をおこなったが、「若手研究」にて収集したデータとあわせることで、後述する身体的修辭と言語的修辭との連関を裏付けすることができたという点で、成果をえたと言える。

②トリニダードの西インド諸島大学セント・オーガスタン校図書館での調査は、殺人事件で大学が一時期封鎖された性もあって、十分な成果を上げたとはいえない。しかし、バルバドスの西インド諸島大学ケイヴ・ヒル校の「ウェスト・インディーズ・コレクション」では、マイケル・スミスのIT A COMEという詩集等、少ないながらも決して日本では入手できないし、英米でも入手困難な資料を複写できた点では、一定の成果をあげることができたと言える。

(2) 修辭の問題に関する考察

①20世紀初頭の脱植民地主義における修辭について：環大西洋文化圏の東端にあり、カリブ海諸国に比べ脱植民地化の動きが早くから見られ、かつ実際の独立も約半世紀早かったアイルランドの脱植民地主義化における社会と文化の関係を考察した。そこで立証されたのは、脱植民地主義の過程であらたに国家が形成されてゆくにあたりその国家が

国民を統合するためには、「提喻」（部分によって全体を指し示す）に代表される修辞が用いられ、空間的な象徴化（部分と全体の連続性）と同時に目的論的（連続した）時間感覚が要請されることが多く、それゆえ、植民地主義を特徴とする近代国家において好まれる修辞ときわめて類似しているという点だった。脱植民地主義を目指す初期の試みにおける修辞法が、皮肉にも植民地主義が用いる修辞と類似してしまうというこの論証を、論文“Decolonization and Deaestheticization”にておこなった。

②1960年代以降の脱植民地主義における修辞について：脱植民地主義を経てポスト植民地主義の過程へ移行したアイルランド詩人の修辞法と、同時期のカリブ海地域の詩人の修辞法とを比較し、前者がやはり起源を中心とした「提喻」を中心とした象徴法的修辞を用いるのに対し、後者が文字そのものの視覚・聴覚的要素をも利用した「換喻」の運動を提示し、起源から単線的に流れる歴史よりもむしろ反復しつつ散逸する歴史を示唆する点で大きな相違があることを、論文「表象の物質性について(1) — 植民地主義以降のカリブ海を例に一」において指摘した。

③アフリカン・ディアスポラと修辞の問題：先述したように、アイルランドの場合は起源を中心とした「提喻」の仕様が目立っているのだが、カリブ海文化においても、アフリカ回帰を指向する側面があり、それはアフリカを起源とした提喻につながる可能性を孕んでいる。しかし「アフリカン・ディアスポラ」と言われるように、カリブ海住民はアフリカから外へ散種された存在でもある。それゆえ、その修辞は単に換喻的なものではありえず、いくつかの別な特徴を持っていることが立証された。それは「アフリカ回帰」と「アフリカン・ディアスポラ」という矛盾した方向性を修辞的に指し示した「撞着語法」であり、修辞的戦略としての「法」である「自由間接話法」であり、「形体的なもの the figural」の重視である。後述するように、カリブ海から北アメリカの現代文化においては「擬態＝ものまね」を積極的に活用する傾向が見られる。この「擬態＝ものまね」という文化様式は、カリブ海文化における言語的修辞と密接に関係する。というのも、カリブ海文化においては「比喩的 the figurative」なものとは別種の「形体的なもの the figural」の使用が際だっており、文字の「形体」利用はいうまでもなく、カリブ海および北アメリカのアフリカ系アメリカ人が重視する「身体性」「音響性」と同じ効果を持つものだからである。このように、言語的修辞と身体的修辞を結びつける「形体」という回路の発見は、国内・国外を問わず従来見過ごされてきたという点で、インパクトをもつ。実際に、この点について論

じたカメルーンのブイア大学での発表“Politics of the Sonic and the Figural in Derek Walcott”は、多くの議論を導くことになった。

### （3）修辞、歴史、空間に関する考察

①上記「換喻」的修辞と歴史観をカリブ海の代表的詩人デレク・ウォルコット（1992年ノーベル文学賞受賞）の詩学を中心に立証：デレク・ウォルコットは、「カリブ海 — 文化か擬態か？」というエッセイで「擬態＝ものまね mimicry」という視点を梃子に社会的・歴史的通念に疑義を呈し、それを転倒していった。まず、「擬態＝ものまね」という汎カリブ的文化特性は、「象徴」を越える「形体」的連続性を持つ点において、換喻的修辞であり、上記アイルランド的修辞と異なっている。しかも、「擬態＝ものまね」を重視する文化は、それを見下してきた西洋近代的文化と修辞の面で相対立するのみならず、思想・歴史観といった側面での相違をも反映していることが立証された。たしかに従来の研究においても、とりわけポストモダニズムを射程に入れた研究では、現代における「オリジナル」と「コピー」または「模倣 imitation」の間での価値転倒がしばしば指摘されてきたが、ウォルコットの言う「擬態＝ものまね」は多少ニュアンスを異にする。前者では時間的に先行する「オリジナル」と後発する「模倣（コピー）」とが同等であることを強調することで、時間性を喪失させひいては歴史を廃棄することになったのだが、ウォルコットの「擬態＝ものまね」の場合、二つの歴史軸を相互照射させることで、逆に歴史を呼び込み、特定の歴史観を通じて流布されるイデオロギーを相対化することになっている。これは20世紀後半において数多く論じられたポストモダン論に対して、ポストコロニアリズムの見地から介入し、議論を複層化させた点において、国内・国外の両方においてきわめて独自のインパクトを与える論考であり、2006年にハイチでおこなった発表、“Mimicry as Figural Imagination”は好評を得ることができた。

②歴史と空間：子午線をはさんだアメリカとヨーロッパという地政学的対立は、いっぽうで「新」世界と「旧」世界という時間性をはらんでいる。それは、世界時を定めるグリニッジ天文台と本初子午線といった直接的な関係性にとどまるものではなく、そもそもアメリカを発見していった時代のヨーロッパにとって、海を渡りはるか遠い土地へいたる旅とは、過去へといたる旅だった。だからこそ彼らは、西インド諸島や南北アメリカ大陸の住民を、文化的段階における自分たちより前の状態にいる人間だとみなしていたのである。しかし逆説的にも、アメリカという自分たちより発達していないいわば「旧」態依

然の原住民たちを発見するやいなや、ヨーロッパのほうで「旧」世界と呼ばれ始めるといふ、ねじれが生じる。この過程を、 Derek・ウォルコットの詩を中心に立証した。この点に関しては、国外では発表できていないが、国内での発表においては査読付きの論文集（図書）に収められた点から見ても、インパクトを持ち得たものと確信する。

#### （4）今後の展望

- ①オートポエシスについて：本研究課題の一つとしてあげていた、2種の記号論/記号学の問題については、まだ考察が至らない部分が多く残った。パースの記号論は「指標性」が問題とされるという点で、環大西洋文化における「形体的」修辞と関係があり、その意味において、従来のポストコロニアル研究の一つの土台となっていたソシユールの記号学から派生する批評理論と違う視点での考察が可能になり、今後の展望への糸口を掴むことができた。しかし、いっぽうで、パースの記号論の系譜として視野にあったオートポエシスについては、「自己と境界の問題」「心的システム、社会システム、身体システム」など、本研究に関連すると思われる概念の大まかな把握までしか理解が至らなかった。実際の環大西洋文化理解につなげることが、今後の課題となる。
- ②身体的修辞について、図表等を用いた成果発表法を工夫し、同時に音響的修辞法をわかりやすく提示する方法を見いだす必要がある。
- ③環大西洋圏文化という枠組みだったが、アイルランドについての考察はあったものの、基本的にカリブ海が中心となっており、南北アメリカに関する考察は不足していたので、今後はカリブ海と北アメリカの移民文化との関係性を中心に調査し、本研究結果を精査してゆく必要がある。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計4件）

- ①梶原克教、“Decolonization and Deaestheticization”、『愛知県立大学文学部論集(英文学科編)』、第54号、pp.27-54、2005年。査読なし。
- ②梶原克教、「表象の物質性について（1）— 植民地主義以降のカリブ海を例に」、*MULBERRY*、第55号、pp.61-72、2006年。査読なし。
- ③梶原克教、「表象の物質性について（2）— 植民地主義以降のカリブ海を例に」、

*MULBERRY*、第56号、pp.37-49、2007年。査読なし。

- ④梶原克教、“What is the Black Atlantic?”、*MULBERRY*、第58号、pp.51-62、2009年。査読なし。

〔学会発表〕（計3件）

- ①梶原克教、“Mimicry as Figural Imagination”, The 8<sup>th</sup> International Conference on Caribbean Literature、2006年11月、ハイチ、ノートルダム大学。
- ②梶原克教、“The Sea and History: Derek Walcott’s Oxymoronic Poetics”, The 9<sup>th</sup> Annual International Conference on Caribbean Literature、2007年11月8日、セント・ルシア、カストリーズ。
- ③梶原克教、“Politics of the Sonic and the Figural in Derek Walcott”, The 10<sup>th</sup> International Conference in Caribbean Literature、2008年11月6日、カメルーン共和国、ブイア大学。

〔図書〕（計4件）

- ①梶原克教、「構造主義と記号論」pp.36-39、「物語論と原型批評」pp.40-44、「ポール・ド・マンと脱構築」pp.50-53、「ポピュラー・カルチャー」pp.146-149、大橋洋一（編）『現代批評理論のすべて』（新書館）、2006年。
- ②梶原克教、「海の詩学」、松本昇ほか（編）『木と水と空と—エスニックの地平から』（金星堂）、pp.79-96、2007年。
- ③梶原克教、「黒人文化と空間の諸相」、松本昇ほか（編）『ハーストン、ウォーカー、モリス—アフリカ系アメリカ人女性作家をつなぐ点と線』（南雲堂フェニックス）、pp.180-193、2007年。
- ④梶原克教、「イーグルトンのアイルランド文化研究三部作について」、大橋洋一・梶原克教共訳『学者と反逆者—19世紀アイルランド』訳者解説、pp.318-335、2008年。

#### 6. 研究組織

(1) 研究代表者

梶原 克教 (KAJIHARA KATSUNORI)

愛知県立大学・文学部・准教授

研究者番号：90315862